

東海民放クラブ活動だより

コロナ禍に負けず美術展開催

浦澤 勇 (THK)

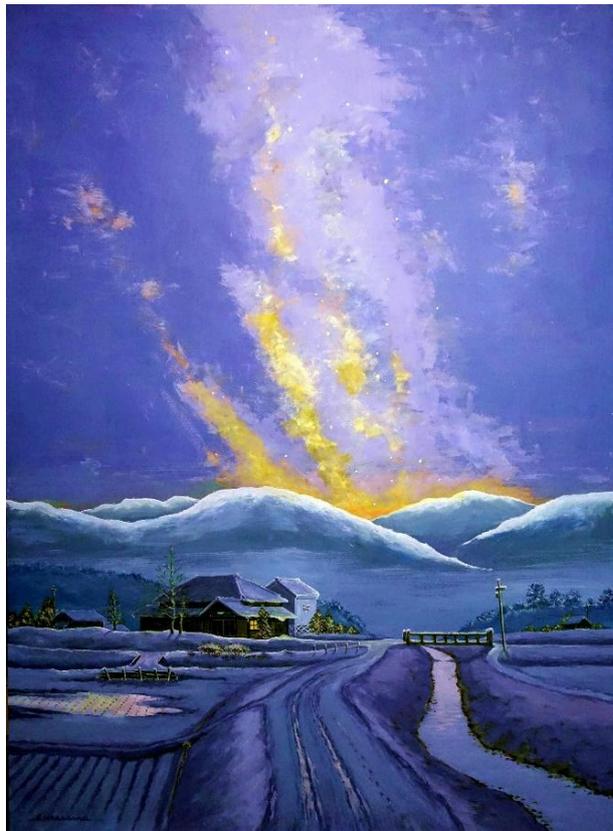
うか」とは誰も言わないので、会場に集まらないなら、メールか郵便で、互選で、ということになりました。話し合いの上とは言っても、まとめ役、稲葉氏(LF)の多大な努力なしには成り立ちせん。まず、兼題は持ち回りで決めて知らせる、それに従い句を稲葉氏まで五つを出す。集まった句はまず無記名で列記し、全員に配布する。会員はその中から五句を選び、一句は特選とし、理由や感想も添えて稲葉氏に再送。稲葉氏が改めて全部に作者名を入れ、誰がどの句を選んだのか、理由などを一覧表にし、全員にメールか郵便で送るという仕組みです。

手間がかかりますが、反面利点もあって、体調がすぐれないとか歩行に問題があるとか、家が遠いなどの人も平等に参加できる有り難い方法です。今の状況では、この紙上句会が最善の方法でいつまで続くのか危ぶみながら句作を続けています。

行かなくていいなら参加してみようかな、という方歓迎します。キリンビアホールで歓談できるのはいつの日か？

昨年、コロナ禍のため三重県を代表する『みえ県展』など各地の美術展は開催されませんでした。しかし秋には『四日市市美術展』なんとか開催されました。

かり、搬出も同じ方法でした。出品は洋画部門『宵の冬銀河』水彩F60号130×97cm、です。額は一廻り大きなF80号154×116cm、搬入搬出に一汗かきます。テーマは我が家から徒歩五分、四日市市桜町から御在所岳を眺めた、三年前の豪雪40cmの心象風景です。陽が落ちて明るさが残る宵、茜色は山脈から天空まで



宵の冬銀河 2020 四日市市美術展入賞

浦澤 勇

にも負けない。パワーを感じます。ベニヤ板に水彩紙を水張りし広げるとタタミ一畳を占領。地塗りは胡粉(貝殻を粉碎して作る日本画の白)を全面に塗布、それからデッサンして色を置き始めます。地・山・空まで赤紫が、宵の雪を現す基本色になっています。単色の微妙な濃淡だけで、暖かさ、冷たさ、淋しさ、それに立体感を表現するのは至難の業でした。天空に広がる濃黄色の華やかさを、一軒家から漏れる黄色の灯りが確りと受け止め、この灯りを竜の眼に見立て画竜点睛になったと自負しています。

しかし残念ながら掲載写真で確認は困難です。

審査の結果は、昨年より上位の『CTY賞』を受賞、美術展を後援する団体の賞です。

更にもう一つ『来館者が選ぶ作品賞』も受賞。洋画は大作71点、油彩画F100号など上位の賞をいくつも押しのけ、三段跳びで選ばれた水彩画、一番欲しい賞です。会場で行き交う人、係員から素晴らしいとおほめの言葉を賜りました。

当美術展は総出品点数400点を超え盛大でした。今まで搬入は2日間、今回は3密を避けるため洋画・彫刻・書道のように、部門ごとに搬入日が指定され一週間か

広がり、秋季より星は冴え輝く冬銀河です。日本画絵具100%で仕上げた水彩画。色の鮮やかさはグアッシュや透明水彩絵具を凌駕し、油彩画